

当院におけるオンコマインDxTTでのRNA解析判定不能に対する取り組みと検討

◎池谷 朱美¹⁾、稲垣 宏美¹⁾、鈴木 文香¹⁾、山田 健太¹⁾
松阪市民病院¹⁾

【背景】

非小細胞肺癌において、ドライバー遺伝子を標的とする分子標的治療薬およびコンパニオン診断の開発が進むにつれ、検査検体の消費や検査費用の高額化が懸念されるため、次世代シーケンサーを用いたマルチプレックス検査の重要性が高まっており、本邦においても、施設制限なく検査提出が可能なオンコマインTMDx Target Test マルチ CDx システム（以下、オンコマイン DxTT）がコンパニオン診断として広く用いられている。各施設において、遺伝子検査のための検体採取や検体の取り扱いの工夫により、オンコマイン DxTT の解析成功率は改善傾向にある。当院においての RNA の品質改善の取り組みとその検討を行ったので報告する。

【目的】

当院での呼吸器領域生検検体におけるオンコマイン DxTT の RNA 解析判定不能に対する改善点と、RNA 解析成績の経時的変化について後方視的に検討した。

【対象】

当院で非小細胞肺癌の診断に至り、2021 年 4 月から 2022 年 3 月までにホルマリン固定パラフィン包埋病理組織検体（以下、FFPE 検体）においてオンコマイン DxTT へ提出した呼吸器領域生検検体（経気管支生検、CT ガイド下生検、胸膜生検、セルブロック検体のうち他院で採取された検体を除く）165 検体について解析した。FFPE 検体の取り扱いについては、日本病理学会編集の『ゲノム研究用・診療用病理組織検体取り扱い規定』に準じて実施し、必要に応じてマクロダイセクションを行っている。

【結語】

希少遺伝子を含むドライバー遺伝子異常に対する分子標的治療薬が次々に臨床応用されるようになり、今後ますますマルチプレックス検査の重要性が高まっていくなか、オンコマイン DxTT の提出率および解析成功率の向上のため、適宜自施設の現状を見直し、それぞれの改善すべき点を検討し、取り組むことが重要である。

連絡先：0598-23-1515（内線 246）